

市民ホールシンポジウム
「人と人の交流を基本とするホールのあり方」

日 時 平成 29 年 10 月 14 日(土)
午後 1 時 30 分 ~ 午後 3 時 30 分
場 所 市役所 7 階 大会議室

【副部長あいさつ】

文化部副部長の石川でございます。本日は、お忙しい中、市民ホールシンポジウム「人と人の交流を基本とするホールのあり方」に多くの市民の皆様にお集まりいただき、ありがとうございます。

お集りの皆様には、これまで様々な面において、本市の文化の発展にご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、市民ホールの整備については、ご承知のとおり、これまで複雑な経緯を辿ってまいりました。

この様な中、昨年度から東北大学大学院教授の小野田泰明先生や支援業者である日建設計コンストラクションマネジメント株式会社の皆様と検討を重ね、本市としては、厳しい財政見込みや老朽化が著しく早期の建替えが求められている市民会館の現状を踏まえ、基本計画をできる限り生かした「シンプルで使いやすい良質なホール」を目指し、建設費の上限を 6 3 億円とした上で、設計者を重視した新たな 2 段階方式のデザインビルドプロポーザルにより整備することとした次第でございます。

この方針の下に準備を進め、6 月 4 日に開催した市民説明会において要求水準書(案)をお示しし、市民の皆様からいただいたご意見を、建設費とスケジュールに影響がない範囲で可能な限り反映した上で、7 月 3 日に小田原市市民ホール整備事業公募型プロポーザルの実施を公告し、事業者を選定する 1 次審査を 9 月 1 6 日に実施いたしました。

1 次審査では、参加資格を満たした応募者 4 者が提出した技術提案書を基に、公開プレゼンテーションとヒアリングを行い、小田原市市民ホール整備推進委員会による厳正な審査により、2 次審査に参加できる 3 者を選定したところであります。

整備推進委員会の佐藤委員長のコメントにもありましたとおり、各者の技術提案は、どれも意欲的で魅力溢れるレベルの高いものでございましたので、どの提案が選ばれたとしても、本市が求める素晴らしい市民ホールができると確信しているところでございます。

これから 1 2 月に優先交渉権者 1 者を選定する 2 次審査を控えているところでございますが、1 次審査を経て、市民ホールのイメージが少しずつ具体化してまいりましたので、我が街にホールができるとどのようなことが起こるのか、年間約 7 0 万人の来館がある「いわき芸術文化交流館アリオス」支配人の大石時雄さんに、これからの日本の地域社会のなかで求められる公共ホールの運営のあり方についてご講演いただき、日頃、市民会館を利用してい

る文化団体の方々に、音楽・舞台・展示それぞれの事業をご紹介いただくことで、新たなホールが今後どのように使われていくのが望ましいか、そのイメージを皆様と共有し、より良い市民ホールを整備してまいりたいと存じます。

最後になりますが、今後も、市民ホールを整備に向けて、より一層のご理解とご協力をお願い申し上げます、私からのあいさつとさせていただきます。

本日は、よろしくお願いいいたします。

【大石時雄氏 基調講演】

みなさん、こんにちは。福島県いわき市からまいりました。いわき市の市民ホールであります、いわき芸術文化交流館アリオスで支配人を務めております。今ご紹介いただきましたように小田原市が進めております市民ホールを整備計画におきましては、推進委員会の委員を務めさせていただいております。よろしくお願いいいたします。

小田原市の方に新しい市民ホールを作る計画があるということは知っていたのですが、実際にお声をかけていただいて、関わらせていただくのは今回のプロジェクトからになります。これまでの経緯等々ありますので、私はこれからということでご承知おきいただければと思います。市民ホールの設計と建築を引き受けてくださる事業者の選定というのが推進委員の主な任務の一つでありますけれども、先月の9月16日土曜日に行われました整備推進委員会第1回、第1次審査において、応募があった4者のうち3事業者を選ばせていただいたところであります。どの提案もそれぞれ特徴的な魅力がありまして、さらにそれぞれ実績のある事業者ばかりですので、大変ハイレベルな提案ばかりであったことは確実に言えると思います。ですから、4者から3者を選ぶということだけでも相当ハードルが高くて、それで1次審査を通過しなかった1者のご提案を見てくださった方がいればどうしてこれが落ちるのという疑問の声が起っても不思議ではないくらい、本来なら4者ともこの場にいらっしやっしてしかるべきだったと思います。それだけ難しかったということだけお話しさせていただきます。

それから、今日、このようなシンポジウムにお招きいただきましたので、これまで兵庫県伊丹市、東京都世田谷区、岐阜県可児市、それから福島県いわき市の4か所、計25年間ほど市民ホールの立ち上げと運営に携わってきた立場から、これからの市民ホールのあり方について少しお話をさせていただければと思います。

皆さん、ご承知のことと思いますが、今の時代、非常に私たちは複雑で入り組んだ多くの課題を抱えております。中でも、日本の総人口が2008年をピークに減少に転じ始めている、それから高齢化、少子化、晩婚化、非婚化、地域の過疎化、貧困化などが進んでいるというふうに言われております。子どもを取り巻く環境におきましても、児童虐待とか、いじめであるとか、いじめによる自死、自殺ですね、それから引きこもりだとか、大学に行っても教育ローンを抱えるだとか、大学卒業してもなかなか正規職員として働く場所がないだとか、生まれて大人になっていくまでのすべての過程において、子ども達にとっては大変厳しい社

会になってるということですね。社会そのものが子ども達をいじめていると言っても過言ではないくらい、非常にづらい状況になっております。そういう中で、市民ホールというものを建てて、整備して、まちに暮らしている方々のために、それから子ども達がそういう環境をどういうふうに改善できるのかといったことに対しても市民ホールの役割というのは、非常に重要なことだというふうに認識をしているところであります。

ですから、市民ホールを職場として舞台芸術を主なフィールドとしてきた者として、こういう様々な課題に立ち向かうこともなく向き合うこともなく、これまでと同じような考え方ややり方で仕事をしていったのかということを経験してきたことが、建築とか運営に反映されているのが、今の私の職場であります。そのようなことで、同じような課題を抱えた中で、小田原市の方にも新しくホールが建つわけですけれども、その中で市民ホールの設置目的や文化・芸術の普遍的な価値といったことをしっかりと押さえつつ、市民ホールは誰のものなんだという、市民ホールが地域社会に果たすべき役割はなにかというそういった本質論を改めて考えるということが僕の責務であるし、これは市民から信頼される支配人、また信頼される市民ホールになっていくことに必要な条件であると僕は理解をしております。

今日のシンポジウムが、小田原市の新しい市民ホール整備事業を大きく前に進めていく推進力を増すために、高めるためにささやかな一歩となれば推進委員としてうれしく思っております。

これから本題に入りますが、これからの時代に求められる市民ホールを考えるに当たり、僕としては5つのポイントを考えています。

一つ目は、音響が良くて、舞台が見やすく、利用者にとって使いやすいホールである。二つ目は、フリーな交流空間が豊かな施設である。三つ目は、人が集まる、人がつながる、ような仕組みになっていること。建物で言えば、デザインになっているということ。四つ目は、ライフサイクルコストの低減がはかられていること。最後の五つ目は、多くの観光客が、利用できるような機能性を持っているということ。この五つのポイントが重要ではないかというふうに僕は考えております。それでは、一つ一つのポイントを順をおって、詳しく説明したいと思います。

まず一つ目の音響が良くて、舞台が見やすく、利用者にとって使いやすいホールであるということですが、一見聞いてみたら当たり前じゃないかということを感じられると思いますが、当たり前のように聞こえて音響が良いホールを作るといことはどれくらい難しいのかということは事業者の方はよく分かっていると思いますが、なかなか簡単に実現できるものではない。小田原市民の方々が自ら音楽を演奏し、演劇を演じ、ダンスを踊ることを楽しいというふうに感じられるホールでなければならない。そのことを思うとホールは最低限でもその三つのこと（音響が良くて、舞台が見やすく、利用者にとって使いやすい）が達成されていないといけない。最低と申し上げても、非常になかなか難しく、逆に言えば、この三つが達成されていれば、本当にそれだけでも十分なホールといってもいい

くらいのもので。音響がいいというのは、オーケストラが演奏して出てくる音ですね、それから合唱とかオペラをやるときの人間の声がとてもいい感じで響く、アコースティック的な音響の良さ、といったことを言ってます。マイクで音を拾って、スピーカーから出すということは、音響機材のレベルとか音響を操作する技術スタッフの力量でなんとかなるところもあるんですけど、中の音が良いてというのは、空間の問題ですから、なかなか人間の力だけでは、なんともならない世界でもあるわけですね。出たところ勝負、作ってみたいとわからない、神様に祈るしかないみたいのところも若干あるわけなんですけれども、そのかなり音が良いていうところを実現するのは今回参加している事業者の力量なくして実現しないということは申し上げておきたい。それから、舞台が見やすい、これは客席数を多くしたいという思いは理解できます。その思いにプラスして、すべての客席から舞台がちゃんとみられるようなホールをと言われると簡単ではない。1階席、2階席、3階席、4階席というふうに客席が多層階になることもありますし、そうすると床の階段の部分と床の傾斜がですね、2階3階4階と階層が上がるごとに傾斜が急になっていくと怖いし危ないしみたいなこともありますし、左右のバルコニー席を作る事になりますと舞台の3分の1くらいが見えなくなることも起こりえますから、なかなか見やすいって客席を作るということは非常にむずかしいんですね。オーケストラの演奏会ならば、音響が良ければ目をつぶって楽しむということもできますけれども、やっぱり演劇とかバレエだとかオペラだとかいいうことになると舞台上で演じている人が見えないということは非常に苦痛なわけですから、やっぱりすべての客席から、良く見えるということであってほしい。それからおまけに席と席の間が狭いと窮屈だし、座るところが固いとお尻が痛くなるし、逆に柔らかいと腰とか首が痛くなることもありますので、見やすい客席を実現するというのは難しいですね。それから、三つ目の使いやすいに移りますけれども、市民ホールの利用者は誰かということで、僕は三種類に分類しています。市民ホールの利用者で、第一のカテゴリーは市民です。第二のカテゴリーは芸術家、アーティストです。プロアマ関係なく、芸術の分野で表現をしている人のことを指します。第三のカテゴリーは、僕のような市民ホールで働いている職員です。この、市民と芸術家とホールで働いている職員、三つのカテゴリーが合わさって、市民ホールの利用者と考えています。このように、市民ホールの利用者を三つのカテゴリーに所属している人というふうに考えていって、例えば、観光で小田原城をたまたま見に来られた方が足を踏み入れるといった観光客の方をその他のカテゴリーと考えています。それぞれの利用者にとって使いやすい施設というのは、当然、市民は市民なりに、芸術家は芸術家なりに、職員は職員なりにそれぞれの立場によって、使いやすい施設ってというのは、なかなか違いはあるのですけれども、ただ、総体として全体としてお年寄りに優しい施設、子どもに優しい施設、障がいを持った人にやさしい施設、ということを深く追求して考えていくと、それは若い人たちにとっても健常者の人達にとってもどんな方にとってもみんなが使いやすい施設につながるのではないだろうかというふうに思います。そのことは居心地の良い空間になるわけですし、市民ホールにいる間楽しい時間を過ごすことにもつながるし、おそらくア

アーティストの方にとっては最高のパフォーマンスが生まれていく事につながっていくんだらうと思います。そのような、音響が良い、舞台が見やすい、つかいやすいというようなことは、ホールの客席・舞台とかだけでなく、楽屋だとか搬出入口だとかトイレだとかホワイエとか駐車場とか練習室とかカフェとかレストランとかソファとかあらゆる部分に反映されていてこそおそらく小田原市民の方々が自慢できる市民ホールの誕生ということになるのではないかということに、わたしも期待しているところであります。

それから、五つのうち二つ目に移りますけれども、フリーな交流空間が豊かな施設であるということですね。街の中心に建てられる市民ホールの意義というのは、本質的に時代と共に変わっていくと思うのですが、市民ホールというのはこれまでも変わってきたし、これからも変わっていくものだから、地域に市民ホールがあることの意味とか価値というのは、変わらないものと変わっていくもの、変わるべきものもあると思うので、価値そのものというのはその時々時代において問い直すべきものだと思うし、一番最初に申し上げたように、非常にこの社会がドラスティックに変わっていきますので、今日まさに問い直す時期にきているのではないかというふうに思っています。市民の文化とか芸術の創造と発表の場所、舞台芸術の創造と鑑賞の場所、そういったものを市民に提供するというのが、これまでの従来型のミッションであったわけですが、僕たちの日々の生活の中ですら、市民ホールというのが果たすべき役割がある、今申し上げたような市民の文化と芸術の創造と発表の場所、舞台芸術の創造と鑑賞の場所を市民に提供するというただそれだけのミッションではたしていいのか、それを続けていくとするならば、段々段々、地域住民が求めるものと少しずつ少しずつずれていって、最終的には忘れられていってしまうのではないかという危機感を私は抱いているので、ホール以外の部分の空間をどういったことに使えるのかを重視していることに繋がっているわけです。スマートホンを操り、ソーシャルネットワークサービスを通じてコミュニケーションを行うようになった社会になったわけですね。そういうところで市民ホールということというのは、どのような出会いの場所があるのか、どのように人と人が交流するのかということが、また問われるところだと思います。その答えの一つとして市民ホールというのは、イメージ的な言い方になるが、僕は、屋根のある場所、屋根のある広場、というものに生まれ変わる必要性があるというふうに考えています。みんなから愛される広場には、いくつかの似通った要素があると思います。広場の片隅には、居心地のいい休憩スペースがあるということ、それから、広場だから広すぎず狭すぎないということ、それから感覚的に居心地のいいというふうを感じる適当な秩序と行き届いた清掃が施されているということ、それからすぐそばには、いつでも使えるきれいで安全なトイレがあるということ、人間には生まれながらにして好ましいと感じる空間、配置というのがありますので、そういったところがかなりの確度で実現されているということがとても重要だらうと思います。市民ホールの中に、そのような快適でフリーな交流スペース、空間が配置されているということがとても重要になってくるということが、先ほど言いましたように単純に市民の芸術文化活動の支援だとか芸術文化を鑑賞・創造するというだけでは担

えない新しい担うべき要素だと、いうことが実現できるだろうというふうに思います。これらはあちこちで言ってきたことなので、大切なことですから、繰り返しますけども、これからの市民ホールに大切に必要なことというのは、整備されるべき空間というのは、一言で言うところのことです。好きな時にやってきて、好きな場所を見つけて、好きなことをして過ごして、好きな時に帰っていく。利用するにあたっては、申請書を出す必要もなければ、使用料を払わなくてもいい、そんな空間とかスペースが必要だということです。ホールとか練習室だとか作業場だとかは、施設使用料が設定される空間や部屋、諸室等々は、当然、施設使用料が設定されていますので、申請書が必要ですし、決められた時間にやってきて、決められた時間には出ていく事を求められています。ただ、そうじゃない空間をどれだけ用意できるのかということが、今申し上げた、好きな時にやってきて、好きな場所を見つけて、好きなことをして過ごして、快適で好きな時に帰っていく、利用するにあたって申請書といった手続きもいらないければ、使用料を払わなくても良いということに繋がっていくということです。もし、行政や市民の方々がにぎわいの創出といったことも実現していきたいと本気で考えているのであれば、今申し上げたような空間を豊かに整備し、その使い方というのは、利用者の方が勝手に決めていくそういう自由なスペースや空間が鍵を握るんだろう、にぎわいの創出の鍵を握ると思っております。そういったスペースや空間が、地元で文化芸術分野での活動している人、それから音楽や演劇などの舞台芸術に関心がある人だけではなく、あらゆる立場の様々な年代の市民の方にも利用価値のある市民ホールになれるんだろうというふうに僕は思います。僕の今の職場はどうなっているかという、ただで使えるキッズルームというのがあります。そこにドキドキキッズルームシアターという主催事業を持ち込むことによって、普段キッズルームを無料で使ってくださっているお母さんとかお父さんとか乳幼児のお子さんにですね、時々無料で演奏だとか読み聞かせだとかダンスとかを提供しております。平日は、午後4時くらいから、土日祝日は朝から近隣の高校生の方々がやってきて、ただで使える空間とソファ、椅子、テーブルがあるところは全部、占領してですね、参考書を広げております。それから、建物の4階にある小劇場のホワイエでは、周辺で働く女性の方々が、お昼休みにお弁当を広げる場所になってます。食後にはスマートフォンを操るか、本を読むか、お昼休み時間ぎりぎりまで過ごして、小劇場のトイレで、歯を磨いて、口紅を引き直して、用を足して、職場に戻っていかれます。清掃は、ホールが使われていようが使われていなかろうが、毎日朝きちっと清掃を行いますので、建物の4階にある小劇場のトイレに来ると、食事をしたあとに、清掃したばかりのぴかぴかのトイレを使っていただけで、とても人気のあるスペースになっております。そういうことが特徴的にうちでは起こっていることなのですが、話はずれますけれども、そういう空間のことをサードプレイスという言葉で、言い表しているようです。サードプレイスのサードは、ファースト、セカンドのサードです。3番目という意味ですけども、何に対して3番目なのかというと、ファーストプレイスというのが自宅、セカンドプレイスが、学生だと学校になるし、社会人だと職場となります。それに対してのサードプレイス、自宅でも学校でも職場でもな

い中間地点にあるような場所のことを指します。これはアメリカの都市社会学者であるレイ・オルデンバーグという方が書いた「サードプレイス、コミュニティの核になるとびきり居心地のいい場所」という本があります。みすず書房から2013年に発行された本なんですけれども、その中にサードプレイスという概念があって、僕はこの本を読んでこのことを知りました。オルデンバーグはこの本の中で、サードプレイスのことをインフォーマルな、つまり公式ではない公共の集まりの公共の集いの場所だと定義しています。分かり易い例だと、ドイツだとビアハウス、日本で言うところの居酒屋です。アイルランドのパブ、フランスのカフェ、イタリアの食堂、ロンドンやウィーンのコーヒーハウスといったところが、サードプレイスの例としてあげられていますが、これらの場所は、大人にとってのサードプレイスで、いわば大人の社交場になっています。誰かに強いられることなく、自発的にわいわい大人たちが集まってきて、いろんなことを話す、そういう中から、イギリスとかだと民主主義が生まれたと言われていたんですけれども、こういったところは大人の社交場になっております。サードプレイスの社会的効用としては、他の誰かとコミュニケーションをする機会とか空間をきちっと暮らしている地域社会の中に、意識していくということが街にとって重要だということです。ところが、日本でも、現代、大人たちの社交場というのは、田舎でも大都市でもあるわけですね。ですが、考えなければならぬことは街が都市化したことによって、子どもにとってのサードプレイスがなくなってしまっているということは、非常に重要だと僕は思っています。その代わりに市民ホールが提供できないかということが僕が提案していることなわけです。ですから、子どもにとってサードプレイスを市民ホールが提供できないかということを考えているわけです。子どもが自宅や学校以外で自分の居場所を確保するということは子どもの成長に欠かせない要素ではないかというのが僕の立場なわけです。死んでしまっていますが、尾崎豊の歌で15の夜というのがあるんですけど、その中にとにかくもう学校や家には帰りたくないという歌詞がでてくるんですけれども、そう思っている学生さんたちが来てくれるような居場所にしてくれるような市民ホールでありたいというのが僕の希望と言うか望みであって、アリオスは学生さんたちにフリーな空間を占領されても大人たちが文句を言わないようにしています。いろいろな工夫をしますので、そういった状況になっているということです。ただ、アリオスの場合は、そういう学生さんたちが勉強する場所として、設計の方が設計してくれた物ではないので、ただ学生が勝手に勉強し始めて、我々がそれを受け止めている、言ってしまうとそういうことになっているので、これからは、そういう学生さんたちが勉強するスペース、参考書とか教科書を広げられるスペースのことも視野に置きながら空間を提供していただければと思うわけです。

それから、三つ目の人が集まる、人がつながる、ような仕組みになっていることですが、これはもう交流を重視するということです。新しいホールの理念です。市民ホールを単なる文化と芸術活動の拠点としてみるのではなく、普段の生活を支える場所として市民に提供してそれから小田原に観光で訪れた人にとっても利用価値のあるような施設にする、そのこ

とによって人と人の交流、市民と芸術の出会い、地元の人と旅行者の交流という、そこで出会ってつながっていくということが目標になるわけです。集まることによる力があると思うわけです。人が集まることで交流が生まれるし、つながっていくことがあります。つながることによって、より良い個人の生き方、人々の暮らしの創造が可能になっていくわけですし、同時に小田原という街全体が活性化していきださうし、商店街にも人が流れて、そこで魅力ある場所を見つけて、見つけたところに若者たちが住み始めたり、小商いをし始めたりすることも起こるでしょうし、そういうことが広がっていけば街全体が活性化していくと思います。そういうことによって地域のより良い未来を築くことができるんだということは絶対的に言えるんだらうと思いますし、もうアリオスだけではなく、全国各地いろんな市民ホールは整備されておりまして、そういったところで、市民ホールが街の人と人が集まって交流して繋がっていくところの拠点になりつつあるなというところはたくさん事例としてありますので、アリオスだけが特殊ということではないということです。そういう役割がだんだん地域社会の中で求められるようになってきているということは、やっぱり否定できないことなのではないでしょうか。新しく作る市民ホールを地域社会の中でどのように位置づけて循環させていくのか、そのために施設運営と事業運営、自主事業をどうやっていくべきか、それを実現させていく手法とは何かとうことを相当考えていかなければならないと思います。その答えとしては、僕は施設と自主事業を市民に開放するのが必要だらうと思います。開放するためには、市民ホールと街がつながっていることが必要ですし、市民ホールで働く職員と小田原市民がつながっていることが必要だらうと。ただ街と施設、市民と職員と芸術家といった者がつながっていくような仕組みを運営においてはしっかり考えていくことが重要ですし、ここにいらっしゃる事業者の方々が最高レベルの市民ホールを建ててくださってもそれをどう生かしていくかというのが、施設を運営する運営主体であり、そこを使う小田原市民の方々にかかっているわけなので、先走った話になりますが、3者からどなたが選ばれようとしても、おそらくかなりいいものができるに違いないので、だけど、それを引き受けて、どう素晴らしいものにしていくかは、運営主体と市民の方にかかっているんだということも、運営してきた立場からは申し上げてきたいと思います。

それから、四つ目のライフサイクルコストの削減が図られることに移りますが、もちろん環境にやさしい施設を目指すということは、もはや国際的なトレンドなので、あえて説明するまでもないが、要するに省エネルギー化に対応した一般照明や空調設備などを導入して、電気使用量を削減することや自然エネルギーを活用すること、太陽光システムを活用した給湯システムとか太陽から太陽光を自然に取り込むとか、自然光を中に取り込んでいる間は照明がいらぬということですね、あとは涼しい風を入れて空調の電気代を節約するだとかということですね、そういったことは事業者の方がプロ中のプロなので、もう完全にお任せしていいと思うので期待しているところです。そういう建設コストの低減というのはもちろん維持管理コストの低減を図りながら、施設の稼働率を高めて利用者の最大化を果たすという意味では最初の段階の施設の設計と建設を担ってくださる事業者の方の知見に

頼るのがとても大きいです。ですから、我々としては難しいところですが、市が最初に説明したように60数億円で用意してるから、これだけ立派なものを作ってくださいという、60数億円というのはイニシャルコスト、初期投資なんですけれども、ここはここで、なんとかそのお金の中で最大限のパフォーマンスを事業者の方々にしていただくんですけど、建ったらそれでもういいっていう話ではなくて、そのあとのランニングコストですね、初期投資・イニシャルコストに対して、維持管理費・ランニングコストという部分もどうやってコストパフォーマンスを出していけるのかということも重要な要素なんですけれどもこれも維持管理費がかからないような工夫を最初の段階でしておいていただくというのが、とても重要になってくるので、ここは我々からすると難しいところがありますね。ここは、事業者をみんなで信頼しましょうというところがあります。運営してきた僕として一つ言えることは、ホール、小田原市だと大ホール・小ホールになりますけど、このホールの中に入れる機材とか備品とかそういったものですね、ホールの導入する照明機材とか音響機材などの設備、備品なんかにおいてもですね、予算があるからと言って、めったに使わない物を入れておくんですね、非常に困ったりします。使いもしない物のためにですね、保管しておく場所を取られたりするの嫌ですので、いつか使うであろうということを考えたときに、ただ倉庫の中に閉じ込めておくということではできないので、ほこりまみれにしておくわけには行かない、いつ使われるか分からないことを考えると常にメンテナンスをしていかなければならない、いつでも使えるように、そうするとメンテナンス費用もかさむので、ホールの設備備品でも小田原市の場合はどういう人たちがどういうふうに使っていくんだろうということをやはり考えてですね、お金があるから入れとけというのは後々のことを考えるとつらいものがあります。だから、僕は四つ立上げてきましたけど、やっぱり使われてないものっていうのはありますからね、舞台上音響照明のどの分野においても、そこら辺は導入するときに考えていかなければいけないと思います。そういったところで、ランニングコストを下げていくことも実績上知っております。

五つ目の最後の多くの観光客が利用できる機能性を持っているということなんですけれども、私が言うまでもなく、小田原市には小田原城という素敵な観光資源があります。市民ホールはその小田原城のすぐ近くに建設されるわけですね。恐らくこれから国内からも海外からもたくさんの観光客が訪れるんだろうと思います。そこで僕が一番取り上げたいのはトイレです。ちょっと皆さん、自分が旅行に行ったとして想像してください。ここに行けばトイレがあるということを分かっているととても安心します。で、生まれて初めて日本にやってきて小田原市に足を延ばしてくれた外国人にとって、宿泊先であるとか羽田空港や成田空港とか以外に安心して使えるトイレがどこにあるのかっていうのは、分からないし、気になるところなわけですね。それがあそこにトイレがあると、しかも使うのにお金がかからない、しかもきれいで安全で快適で並ばなくても入れる、結構数がそろっているらしいよという情報があれば、街歩きの拠点にしてくれると僕は思います。トイレは生きるのに必要な施設です。それと同時に歯を磨くし、口紅を引き直すし、場合によってはトイレで着替える

人もいる。それだけではなくて気分を切り替えるきっかけにもトイレというのはなるわけですね。そういう大事な空間なわけです。その意味で、外国人観光客にとって、市民ホールに行けば僕が申し上げたようなトイレがあるということをインターネットで知っておけば確実に小田原市の街歩きの拠点にしてくれると思うので、とても重要な要素だと思います。それからトイレにまつわるものとしては、LGBTという言葉聞いたことがあると思いますが、これは、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの頭文字をとったものなんですけれども、ごく簡単に言うと、自分の恋愛対象が同性であったり、もしくは異性と同性の両方であるのがLGBで生まれたときに診断された身体的性別と自分の感じる性別に違和感がある人がTなわけです。従来の公共施設の多くは、男子用と女子用とみんなのトイレという名前のついた多機能トイレがあればそれで許されてきたところがあるんですけれども、世界基準で言うところのLGBTと呼ばれる性的少数者、性的マイノリティの方々が周りの目を気にすることもなく、自身が嫌な思いをすることもなく、入りやすいトイレをしっかりと考えて設置するということは、恐らく公共施設を筆頭にしてこれから出てくる新しい考え方のトイレになっていくのではないかということと言えるので、ここは可能であれば小田原市が率先してそういったことも考えて、そういう人たちのためのトイレを作ってくれたらありがたいかなと思っています。このテーマについては、プロである建築デザイナーと市民の方がワークショップの場で取り上げて色々知恵を出し合うのがいいかもしれません。そのように僕は感じます。そうすると、市民の方々から言わせると、私たちの周りにはそういった方がおられないので分かりませんということをおっしゃる方がいられるかもしれませんが、だけでも、調べたところによると、電通ダイバーシティラボという組織があるらしいですけれども、その2015年の調査報告では、約7.6%の人が、日本において、LGBTであると発表しております。これは結構な数字だと思います。だから、私の周りにはいないということではなくて、私が知らないか、もしかしたらいるんだけど僕には言っていないことかもしれないです。それくらいいらっしゃるということです。そうすると既存のトイレでは入りにくいと感じている人が、私たちの身近に確実にいるということは理解しておいた方がいいと思うし、外国の方々も国によっては多いところもあるし、あまり少なくない国もあったりするわけなんですけれども、決して他人事ではないということを知っておいていただければと思います。そして、新しい市民ホールの整備に参加するということは、トイレという一つのことにおいても、自分で普段考えていないことを市民ホールのためのワークショップに参加することによって、世界的なテーマ、重要なテーマですね、そういったことを一緒になって考えたり、調べてみたり勉強してみたりということが、起こりうるわけなので、やっぱり市民ホールの整備においても市民の方々が参加していただくということは、市民ホールの成功、不成功に関わらずとても重要な事だろうと思います。それから最後にトイレ以外のですね、外国人観光客のことを考える上では、どうしてもWi-Fiですね。どこでもネットにつながるようにしておくことはもう当然になってきていますね。現代は多くの人達がスマートホン、それからタブレットを携えて旅行

にでかけるわけです。友達とかと写メするわけですし、人物とか景色も撮り、小田原城の天守閣は撮るだろうし、写真を、最近は女性を中心に、料理ですね、コース料理、コースで出てくるのを逐一品ずつ撮るじゃないですか。そういったふうにレストランなどに入っても料理の写真を撮り、電車に乗る時には路線を調べる、旅の必需品になるわけです。これはもう全ての外国人観光客の方が、スマートホンかタブレットを持ってるわけなんですけれども、このような方々がちょっと休憩して、調べている。飲み物を買ってきて飲める。トレイに行きたかったらトイレに行く、というふうに外国人観光客の方々が暑い日は涼しく、寒い日は暖かく、疲れたら座っておしゃべりしながらゆっくり誰からもとがめられることもなく安心して使える空間というものが用意されていれば、最初のトイレだけではなくて、小田原市に足を運んでくださる外国人観光客だけではなく、全国から小田原市に観光に来られる方々にとって、その観光の拠点として、市民ホールが確実に選ばれる。しかも、小田原市の場合は、最高の観光資源である小田原城天守閣のそばに市民ホールが建つということは、そういう空間を作っていないといけないのではないかとと言われてもいいくらい、観光客にとってはとてもポテンシャルの高い位置に建つわけですから、ぜひ観光客の方のことも、特に外国人観光客の方のことも考えて整備していただければ嬉しいかなと思います。そろそろ持ち時間がきますので、僕の話もおしまいにしないといけないんですけど、12月には小田原市の新しい市民ホールを設計して建ててくださる事業者の方が決まるわけです。個人的にもとても期待しています。繰り返しますけど、なんといっても小田原城の天守閣のそばに建つわけですからね。小田原市で生まれた子どもは高校を卒業する年齢になるくらいまでは、小田原城の天守閣がいつも視野に入るような生活をしながら、大人になって欲しい。高校まで行って、高校を卒業するときに大学だったり、就職先だったり、海外旅行だったり、そういう時に小田原を出られるかもしれないけど、小田原を出てからも常に本人の記憶の中には、子どもの頃を思い出すと、小田原城の天守閣がどっかに写っているみたいな、そういうことは起こり得ると思うんです。そういった小田原で生まれた子ども達になって欲しいというのは、小田原市民ではない僕でも思うわけです。とても重要なことだと思うんです。とするならば、今度整備する市民ホールが子ども達が、生まれて高校生になるくらいまでの間どの年代であっても市民ホールに足を運んでいる状態をどう作るかというのがとても重要な事じゃないかなと思います。僕の今の職場の、いわき芸術文化交流館アリオスのそばには、小田原城の天守閣のような立派なものはないんです。公園はありますが、天守閣はありません。だけど、僕としては、お母さんのお腹の中に入っている時と無事に生まれてキッズルームを使ってくださって乳幼児の間はキッズルームが交流の場になっているし、そこでアリオスでは先ほど言いましたとおり、キッズルームシアターということで、時々プロの演奏家、外国の演奏家も含めてモーツァルトとかバッハとかベートーヴェンを45分間演奏したり、プロの演劇人が、絵本を読んで、地元の演奏家がピアノを弾いたり、あとはプロのダンサーがきて、お父さんとお母さんが乳幼児と手足を動かして、ゲームをして体操をする。それ全部無料なんですよ、そういうふうにしてます。子どもが小学校にあが

って中学校にあがる頃には、小中学校だと私達のほうで学校アウトリーチということで、アーティストを連れてそれぞれの学校に行って、音楽事業のお手伝いとかしますから、大体小中学校になるとアリオスの「おでかけアリオス」って呼んでるんですけども、学校アウトリーチを経験します。それだけじゃなくて、今度は「体験アリオス」って呼んでるんですけども、バックヤード的な事業なんですけど、劇場で音響を操作したり、照明を操作したり、舞台上で舞台装置の転換をしたり、小道具を出したりということ子どもたちが体験できるという事業があるんです。そういうことも大体小学生の人気事業になってます。今度は高校になるとですね、中学校になると吹奏楽をやる人が増えてくるので、当然、中学校、高校になると吹奏楽や合唱、演劇部たちのコンクールの発表の場として、うちの大ホールが使われています。それだけではなくて、高校生の場合は、高校生の演劇部、写真部、それから新聞部、放送部の部活の延長線上にアリオスの事業がある。アリオスで体験できることにしているんですね。例えば、放送部の人達だったら、何しているかというアリオスの自主事業の時の例えばNHK交響楽団の定期演奏会の時の影アナっていうんですけど、場内放送ですね、スマートホンの電源をお切りくださいとか、撮影禁止ですというやつですね。ああいうことは、高校の放送部の部員さんに生でやってもらってるんです。部活の延長線上にアリオスの事業を位置付けたりということをしてたりします。言いたいことというのは、要するにお母さんのお腹の中にいるときから、生まれて高校卒業するまで、とにかくアリオスに出入りし、アリオスの事業を体験するというをストーリー的に組み立てていて、それを実現してます。そのことによって、いわきの子どもたちにとって、一つのサードプレイスになれたらなという願いを実現しているわけです。話を元に戻すと、小田原市の市民ホールは、繰り返しになりますけど、小田原城の天守閣のそばにできるので、市民ホールに出入りして大人になってくれると必ず小田原城の天守閣は記憶に刻まれるとことになろうかということです。子どもの育っていく環境を非常に厳しくしてしまっているとうことは、僕も含めて大人の責任なわけです。ですから、小田原で生まれて高校生になるまで、すべての子どもたちが幸せだとか、小田原に生まれてよかったよねと思ってもらえるような子ども時代を過ごすということがとても重要というよりは、むしろ、こういう世の中にしてしまった私達大人たちがせめて子ども達にしてあげられるだろうということなので、音楽の活動をしていても演劇の活動をしていても、もしくは市民ホールをつくるにしても、ホールを運営するにしても、とにかくあらゆる機会を使って、子どもたちが幸せな子ども時代を過ごしていける環境を作っていくこと、提供していくことが、より良い市民ホールを作る作らないっていう狭義のプロジェクトだけではなくて、広い意味でみんなが共有しなければいけない努力しなければいけない考え方なのではないかと思う。僕自身はこの考え方に立って、自分が今務めているいわき芸術文化交流館アリオスの施設運営・事業運営のコンセプト・ミッションに反映させているということ、自慢じゃないんですけどもそういう前提で運営しているということだけはご紹介しておきます。

時間が無くなってきたのでそろそろおしまいになりますが、12月に今日来てくださって

る3事業者の中の一つの提案を選ばないといけないという過酷な使命が待っています。僕自身もその委員の一員に加えていただいているので、すごく色々と考えています。時間があると資料を机の中から出して、眺めたりしています。それで、ここにいらっしゃるすべての人達に共有していただきたいことを最後に言って、終わりにしますけれども、今度の市民ホールは大ホールと小ホールというのを考えているわけですが、この大ホールと小ホールは小田原市民の文化と舞台芸術活動の発表の場になるんだらうから、とにかくクオリティの高い大ホールと小ホールを作る。そのことを最優先事項、重要視することに置くのか、それから今日約1時間の中でお話しさせていただいたホール以外のフリーな交流空間を多様に整備していく事を重視するのか、この二つはものすごく難しい選択なんです。もちろん、この両方を実現するということが理想なんだけれども、建築できるスペースだとか、ホールの客席数だとか予算だとかこういった様々な要因で、こういった二つを実現させるのは簡単ではない。そういう中で、僕自身も、このプロジェクトに委員として、立ち向かう立場として、今一番悩んでいることは、そのことです。もう一度繰り返しますが、大ホールと小ホールは小田原市民の文化と芸術活動の創造の場所であり、発表の場所になるのだから、言い換えれば市民が使うホールなわけだから、とにかくクオリティの高いホールにする。ベルリンからベルリンフィルを呼んできたいから音響の良いホールにしたいというのではないです。市民の芸術文化活動として使うホールだから、とにかくクオリティの高いものに絶対するぞということで重要視するのか、それとも、もう一方のフリーな交流空間とうものを重視して選ぶのか、いろいろな判断基準の中で僕の中では非常に揺れている。今のこの正直な気持ちを皆さんに聞いていただくことで、今日の話が終わりにしたい。どうもありがとうございました。

【質疑応答】

市民 市内に住む者です。一番最後のお話で、ベルリンフィルを呼んでくるようなホールではなくクオリティの良いホール、その線引きを先生はどのようなところで引かれていらっしゃるのでしょうか。

(大石) いわき芸術文化交流館アリオスの大ホールを作る時に、市と市民の方々がとにかく音響の良いホールを作って欲しいというのが、第一のミッションだった。その話を聞いた時に、何ですかと聞いた時に、市民の方と市役所の方が何と言ったのかというと、いわき市の場合は吹奏楽がとても盛んなところで、高校も中学校も全国大会に出て、金賞・銀賞、いわゆる一等・二等をとるような小学校・中学校が複数校ある。そういう子ども達が練習だろうがコンクールでの発表だろうが、とにかく音の良い空間を作って欲しい。なぜならば、子どもの頃に言葉を覚える、お父さん・お母さんのしゃべっている言葉、テレビから出てくる言葉を聞いて言葉を覚える。英語とかでも勉強しようと思えば、聞き取るということが重要である。ですから、耳から入ってくるのがどれくらい良いか、耳から入ってくるものによって、言葉を覚えたり英語をしゃべれるようになっていくということは、音楽で言うと、音響の良い空間の中で、練習したりコンクールをしたりすることによって、吹奏楽をやっているいわき市の中学生・高校生の音楽に対する感性だとかセンスだとかというのが高まっていくということです。そういうことが実現したいので、なにもベルリンフィルとかウィーンフィルというところを呼んで来て、指揮者とか演奏家が素晴らしいって言ってもらえるようなホールを作りたいのではなくて、まずは子ども達のためにということだった。僕はすごくいいことだと思いました。

市民 概念としては分かるのですが、ベルリンフィルを呼んでというホールと市民がクオリティを楽しむホールというのは、どういう特性でどういう違いがあるかというのはどういう線の引き方をされたのでしょうか。

(大石) プロ向きかとか子ども向きかという線の引き方ありません。僕が申し上げたのは、アコースティックな音響の良い大ホールを作りたいという、その目的は何かというところでプロが使うのか市民が使うのかを想定しているのかを言いたくて例に挙げただけです。

市民 それは、同じクオリティと考えてよろしいのですか。

(大石) もちろんそうだと思います。うちは、オープンの時にはNHK交響楽団の演奏で、市民の合唱団の方が第九を歌って、指揮者はいわき市出身の小林研一郎氏で、やったときに小林研一郎さんからNHK交響楽団の方からもこの音はいいよと言っていたし、ロンドン交響楽団もオープニングの年にゲルギエフさんという世界的に有名な指揮者が指揮し、ロンドン交響楽団に演奏していただきました

が、そのときもゲルギエフさんもロンドン交響楽団の方もすごくいい音で良かったねと伝えてくださったんで、ハッピーなことだったんですけども。

市民 ということは、お話の中で、ベルリンフィルを呼んで来るということと、市民のクオリティということでお話しされましたけれども、ハードとしてはそこに区別はされていないと。

(大石) もちろん、そういうことです。現実はその通りです。

市民 計画段階から市民が参加する、市民の意見を反映させる、それから出来上がってからも運営等に市民が参加していく、その辺についてはどのように考えていますか。

(大石) これまでの経過、今回至るまで、前回、前々回という経緯があって、そのプロセスの中で、市民の方と市側、市民の方と事業者側にどういう話し合いとかワークショップとかがあったかという経緯を私は現場として確認しているわけではないので、無責任なことは言えないが、僕が関わっていくこれからの中で、12月に事業者さん1者決まったらですね、その方々が主体的に実施設計と施工に入って行くわけなんですけれども、その中で市民の意見だとか市の意見とか、もしくは私がその後関わるかどうかは分かりませんが、例えば私のような運営を経験している人間が選ばれた事業者さんの方に少し希望みたいなことを言ったり、さっきトイレの話をしましたけれどもそういうふうに直接ワークショップなんかでトイレのことを考える時間が取れるのかというのは、そういう場が設けられるのかどうかというのはちょっと私の立場では言えないので、市の方の設定になってくると思うのですが、私の立場で言えることは、もう12月には恐らく1者決まるのだから、その部分はもうその方々にお任せしてですね、信頼して、良い物を作ってくださいましよう、我々市民のできるということというのは、先程の話の中でも言いましたけども、建った後のことをどう考えるのかということがこれから凄く重要ということですね。これからは小田原市民の皆様と建った後のことを考えなければいけない段階にきているということはしっかり思っていて、これまでの経過で、いろいろなところに参加された市民の方がたくさんいらっしゃるんだと思うのですが、そういった方々を全く無視するとか、ないがしろにするとかいう気持ちは全くなくて、小田原市に新しく整備される市民ホールにとっても興味があり、無関心ではなく、これまでいろいろ関わってこられたんでしょから、そういった方々のエネルギーは、建った後の運営に今度はシフトチェンジして、例えばアリオスでやっているように、いろいろな自主事業と施設運営に市民の方々と一緒に運営しているような仕組みを作っていくということにチェンジしていくということは可能性としてはあるし、少なくとも僕はそういう運営をしているので、アリオスのように可能性は絶対にあると思うので、そういったことは市民の方が、これから市の方に運営主体はどうするのかとかいう部分も含めて、関与されていったらいいんじゃないかなと

思います。ただ、時間の経過がボンボンボンと進んでいるところもあるので、新しい市民ホールの整備に関心がある小田原市民の方々がいらっしゃるならば、これからは建った後のこと、どう使っていくかどういふふうに小田原市、小田原に暮らす人々、もしくは未来に小田原に生まれてくる子ども達にとって、どう使いこなしていくか使いつぶしていくかということに知恵をお貸しいただきたい。立ち上げて運営してきた僕の立場から言うと、市民の皆様方をお願いと期待をするところは、建った後のほうが市民の方の関与する機会は恐らくこれからもっと設けられていくだろうと思います。そういうお答えしかできませんがすいません。

市民 大石先生のお話を聞いていて、すごく市民のことを考えてくださってフリースペースがすごく大事とおっしゃっていただいたことがとても嬉しかったのですが、市民さんがおっしゃったように音響はやはりどうしてもしっかりさせていたきたいので、先生のお立場でどこまで言っていただけるのか分かりませんが、この前、違うところで市の副市長にお聞きしたら、音響はどうやって担保するのですかと聞いたら、日建設計が見てくれるからいいんだというような意見を言われてました。でも、音響はちゃんと専門家にきちんとアコースティックな音が大丈夫ということをやっていたきたいと思います。先程先生が、最後は設計者に任ず、信用しておっしゃっていたのですが、そこも少し気になってまして、このライフサイクルコストというのが、この前の1次審査のプレゼンテーションを見せていただいた時に、地下から水をくみ上げて色々使うというのがありましたけれども、例えば地下を掘るっていうのは高いということを前から市民検討員というのをやりましたので、聞いていたので、なるべく地下をいじくらないほうが、絶対コストはかからないし、その後のメンテが維持管理を小さくしていかなければいけないということを先生がおっしゃっていましたが、すごく良いことをおっしゃるなと思いましたので、そのところをぜひ今回の残っている3者の中で、エネルギーのことをいっぱいおっしゃっていたので、ぜひそこを単なる大丈夫ですではなくて、金額のこととかコストのこともしっかり基準の中に先生の質問の中に業者さんの方たちにも聞いていただいて、作る時は60億で間に合っても、その後どうなのということをお聞きしたいです。それから、今回、バリアフリーがとてもダメだと思うのですが、なぜかみんな2階にホワイエがあり、2階から大ホールに入るようになっていたり、車いすが本当にうまく、障害のある方が、お年寄りの方が本当に舞台にスムーズに行けるのかなというのを私はどの案も大変疑問に思いました。ですから、そこもできれば次の時までどの業者の方も先生たちが意見を言っていただいて、使いやすいというように直していただくことは可能なのかな、このままいってしまうと、座ってなんとか音はできたとしても、すごいここまで来るのに歩きにくい、二度とここに来たくないよ、ということになりはしないか

とすごく心配してます。本当にお金のことも大事ですし、市民のスペースをしっかり作っていただきたいと思います。お金が高くないので、音響の方は大変かもしれませんが、フリーなスペースとか私達市民の場所を作るのはお金がかかる事ではないので、ぜひそこは先生方のご意見を、業者さんから聞くときにそこは何とか変えることはできないかとか、そういう方向でやっていただかないと、なんでここまで待ってきたのか、分からないと思います。よろしくお願いいたします。

(大石)ありがとうございます。今のはご質問というよりもここにいらっしゃる皆さんで共有しようという話なので、私が答えるまでもなく、今日は事業者さんいらっしゃってますので、皆さん今の方のご意見を承りましたし、僕の方にも12月の選考に臨むにあたっては、頭に置いておきますし、よろしくお願いいたします。

【小田原市文化連盟 事業紹介】

(杉崎氏)文化連盟の事務局長の杉崎でございます。よろしくお願いたします。また、今日は大石様から、色々な貴重なお話を伺いました。ありがとうございます。私たちは、市民ホールの中でワークショップを色々やってきました。その中でも、お手洗いの話の中で、LGBTですか、そういう話が出てきたのは、「あっ」で思いました。そういったことがこれから新しい市民ホールに活かされれば、そういう気持ちでいます。

私たちは、実は、1987年の2月、3月、4月の14日に、現在の市民会館の大ホールで、読売日本交響楽団、NHK交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団による3回連続コンサートを行ったことがあります。その時から、基本的に、市民会館のホールの問題が色々出てきました。その次の年に、山本直純さんと呼んで、そこで建替えのメッセージコンサートを実施しております。そのような形の中で、既に私たちの仲間が動いていました。それから数年後の1989年でしたか、その年に、小田原市文化連盟の石井久一会長が市に建替えの要望書を出しております。そのような過程からいきますと、既に30年経っていることとなります。それだけ文化や芸術に関わってきた人たちにとっては、非常に待ち遠しい、そういった建物になっております。今回はぜひ作っていただきたいと思っております。その間に、市長さんも2人替わっておりますので、一つよろしくお願いたします。今日は、現在の市民会館の大ホール、小ホール、展示室、会議室で活動してきた中で、小田原市文化連盟は、色々な団体が30くらいあるのですが、展示部門、舞台部門、音楽部門に大きく分かれております。その中から、それぞれの問題点等について、現在の市民会館から新しいホールへの簡単な要望みたいなものがあればと思い、お話をさせていただきます。ただ、要求水準書の方には色々書かれていますので、あまり細かいことを言うよりも、一つずつ音楽関係、舞台関係、展示関係という形でお話しさせていただきます。最後にまた私の方でお話しさせていただきますので、一つよろしくお願申し上げます。それでは、最初に音楽関係の方で、横川さんからお話しさせていただきますので、お願申し上げます。

(横川氏)皆さん、こんにちは。私たちは、小田原市文化連盟の音楽部会、音楽部会というのは小田原地区合唱連盟、小田原地区吹奏楽連合、小田原フィルハーモニー交響楽団、小田原アンサンブル連盟、小田原音楽連盟、楽友協会、小田原大正琴協会という7団体が参加して、構成されています。我々は、小田原市文化連盟の部会の中で、一番市民会館を使う回数が多いのではないかと考えております。小田原地区合唱連盟としては年1回の市民合唱祭や、小田原音楽連盟と楽友協会の共催で市民による音楽フェスティバルを来年の3月に行うのですが、12回目を

迎えます。楽友協会の交響楽団と市民による合唱のコラボレーションによる音楽会を行っています。これは市民ホールの建設応援イベントということで、名前は変わりましたが、12回目ということでがんばっていますが、まだ何年かホールができないということを悲しく思っております。あと、加盟団体としては、年1回、2回の演奏会、年4回の演奏会を行っている団体もあります。私は、小田原地区合唱連盟の副理事長を務めておりますが、小田原地区合唱連盟は30団体参加しているが、その中のいくつかの団体が年1回定期的な演奏会を行ったりして、市民会館を利用させていただいております。我々が市民会館を使う上で、今問題になっているのは、市民会館にはリハーサル室がない。そのために、市民合唱祭においても、本番前にリハーサルができないことを悩んでおります。それから、今の市民会館は入口の扉が、今では考えられないが一重である。そのために、演奏中にドアを開けられると外の騒音がそのまま入ってきてしまうという非常に今では考えられないことが起きております。また、ホールの階段ですけども、若い頃は感じなかったが、年を取ると非常に段差があるのを感じます。他のホールに行ってみて感じるのが、小田原市の市民会館の階段は2倍近い高さがあって、今の高齢化時代に対してはバリアフリーではない。それから、2階に上るにも階段しかありません。そのためにお年寄りの方が2階に行くことはできないような状態になっております。それから、あとはトイレです。色々改修はしていただいているが、絶対的な数が足りないので、女性の方はいつも並んでしまうことが起き、非常に苦慮しております。それから、ピアノが2台あるが、舞台裏に放置といったら語弊がありますが、平置きされており、収納庫がありません。収納庫をぜひ作っていただきたいなと思います。それから、楽屋ですが、今の市民会館は楽屋の数が足りず、事業者の方には楽屋の数も考慮に入れた設計をぜひ再度お願いしたいと思います。現状、困っていることは他にもありますが、大体今申し上げたことがメインだと思っております。一つよろしく申し上げます。

(杉崎氏) どうもありがとうございました。音楽関係で大ホール、小ホールを使うに当り、基本的に一番のテーマとしてはリハーサルができない、これが大きなテーマになります。そこを考えながらやっていかなければならないということです。次に、同じく、大ホールや小ホールの関係になりますが、舞台関係ということで、日本舞踊の花月さん、お願いします。

(花月氏) 日本舞踊の花月寿扇と申します。どうぞよろしくお願いいたします。舞台関係といたしましては、劇団こゆるぎ座、小田原吟剣詩舞道連盟、小田原洋舞連盟、小田原大正琴協会、小田原謡曲連合会、小田原三曲会、小田原日本舞踊連盟が利用させ

ていただいております。現在困っていることといたしましては、大道具の搬入口が狭くて、上から下まで降ろさなければならない。あと、階段が多くて、特に今日お話ししたいのは、楽屋の問題ですが、階段が多くて出演までに疲れてしまう。1階の畳の部屋はとても利用がしやすく、私たち日本舞踊としてが一番理想的であります。地下のお部屋はござとか畳表のような物が準備していただいてまして、それを敷いて、拭いて、それで大道具さん、衣装屋さん、床山さん、その方たちに入らせていただきます。2階の会議室を利用させていただいていますが、鏡はとていいのですが、利用する人がシートを持ってきて、全部敷いて、自分たちで準備しなければいけない、テーブルも移動させてなければいけない、そのような感じになっておりますので、できましたら今度のホールは、土足厳禁にさせていただくか、畳のお部屋も少し作っていただくことを希望しております。邦楽関係、舞台関係の方々幅広く利用できるホールをよろしく願いいたします。以上です。

(杉崎氏) ありがとうございます。基本的には楽屋を中心として非常に気になっているのが現状です。多くの方が楽屋を使いますので、靴で入るのか、土足なのか、同時に日本舞踊さんは、その場所で着替えますので、汚れたりすることから、どのような形をとるのか、一つよろしく願います。今日は、大ホール、小ホールのホール系が中心の話となっておりますが、とにかく今回の市民ホールの場合は、そちらが主体になって初めから動いてしまいますけれども、実際には小田原の文化の中では展示系が凄く動いています。色々な展示イメージの物があります。そのような物がこれからどのような形で動いていくかということがありますので、展示関係では、日本画の小玉さんから話しさせていただきます。

(小玉氏) 小田原市文化連盟の小玉と申します。よろしく願います。私は、今日は、展示関係につきまして、ご説明させていただきます。展示関係というのは、色々団体があるのですが、特にその団体の中において、特徴的な3団体についてご説明させていただきます。その3団体の条件がクリアできれば、全ての展示部門については、OKになります。まずは、西湘美術協会です。西湘美術協会というのは、小田原市内の中で一番規模の大きな団体展になります。現在は、市民会館の1階のロビー、2階の展示室と食堂の裏手にあるピロティ、3階の小ホールとロビーを使っています。全部をトータルすると691㎡になります。あと大事なことは、壁面の長さです。壁面の長さにつきましては、私なりに測ったのですが、244mあります。ですから、西湘美術協会につきましては、それだけのスペースが必要であるということと、ある程度引いて鑑賞できるような状況を望んでいます。

次に、小田原書道連盟です。小田原書道連盟につきましては、特に高さを要求しております。2尺×8尺の作品がありますので、8尺は約2.4mですが、上下の空間を含めると、約4mの高さが必要であることをお願いしたいと思います。あともう一つは、小田原華道協会ですが、壁面の前に奥行き1.2mのテーブルを置いて、そこに展示するという形をとっています。それも引いて鑑賞できるような状態を確保したいと考えています。代表的な3団体の要望と言いますか、特徴をご理解いただき、それに対してPRできるような設計をお願いしたいと思います。以上です。

(杉崎氏)ありがとうございました。私の方で、最後になりますが、結論は、私たちの中で、例えば大ホールの方で、要求水準書の方にも記載があるかもしれませんが、洋舞関係の方などの舞台を瞬間的に切り替えなければいけない、つまりバトン利用ですが、その数がどれくらいあるかというのが一番ポイントになります。それとともに小ホールの方にもバトンがなければならぬ。どのくらいの数が設置されていくか。それによって短時間で演技ができるということです。現在の市民会館を実際に見ていただくとわかると思いますが、バトンの数が非常に少ないです。小ホールも少ない。こういった意味でも、新しい市民ホールを作るにあたり、バトンの数が必要となると思います。それから、もう一つは、実は私たちはここ3～4年、小田原市文化連盟としてあちこちの場所に視察に行っております。県内だけでなく、長野県諏訪市の方に行ったりしておりますが、特にその中で、先日相模湖交流センターに行ってきました。ここの場所の音が非常に良いという話から、その場所に行きました。実際に相模湖交流センターの小ホールを見に行ったのですが、この小ホールは平土間のロールバック形式ですが、このロールバック形式の座席が短時間で出てくる、座り心地も非常に良かった。それともう一つは、舞台がせり上がってくるのですが、舞台の中が倉庫にもなっている。そして、その倉庫のために、中はがらんどろに近いです。それにより音が良くなっていると支配人の方が説明していました。相模湖交流センターのホールの舞台の袖が非常に広がったです。それによって、荷物を置くなど色々なことができる、また同時に袖のところに幕ではなくて木戸のような物が出てくる。高さが6mくらいありますが、出てくることによって袖が完全に隠れてしまう。こういった所が非常に良かったと思っています。また、今では当たり前かもしれませんが、親子室があって、子ども達が泣きそうな時にはそこに連れてける場所が常識的に作られていたことが、小田原市の市民会館にはないなと思ったところです。今言った親子室などは実際に今までワークショップでやってきた中で、全部載ってきているはずですので、要求水準書に出ていると思います。それから、もう一つは、展示関係ですが、小ホールの方で、小玉さんから要件の話が出ましたが、

一番ポイントになるのは、量のある展示会を行う時は、小ホールとギャラリーを併用することとなります。その時の使い勝手としての動線の問題、それから展示する物の高さの問題として、小ホールの場合どのようにして高い物を展示するか、いわゆるパネル利用ですが、実際どれくらいの高さのパネルが存在してくるかということがあります。ですから、そういったことを含めて、小ホールと展示室の運営の仕方が、一番難しい部分だと思います。あとは、要求水準書に載っているか確認していないのですが、ギャラリーのことですが、常時きれいにしておくという話がありました。釘を打って上から穴を埋めたとしても、そこだけ色が変わってしまうと困るので、いつも使うペンキは同じでなければならない。そういう約束を作っておいてもらえれば、いつもきれいな場所が出来上がっているという話がワークショップでありました。そういうことが一つの流れとして存在しております。それから、事務局長としての立場もありますが、皆さんにお願いしたいのは、これから新しい市民ホールが出来ていく中で、小田原という場所には、団十郎という歴史と桐座という歴史があります。そういうことを踏まえた時に、どのような物が考えられるのか。そして、もう一つは、若い人たちがどのような形で使っていくか。我々は今のままの展示でいってしまうかもしれないが、若い人たちはどのような形で使うのか。例えば、既に、映像を出して前に展示するとかそういうような企画もされております。これからもっともっと先に行くのではないかと思いますので、そのような進化をどのように解釈するか。ここを使って色々な物が出てくると思いますので、そういうことができる可能性のある物にしていきたいと思っております。それから、あとは、大変難しい問題かもしれませんが、今そのパネルに書かれている提案を見たり、要求水準書を見ると、展示関係には、大体550㎡というのが出てました。ただ、この市民ホールが始まったころというのは、もっとギャラリーのスペースが大きかったです。30年前、当時の市長が、神奈川県美術展とか神奈川県華道展を小田原市に持ってこれないかとの話をしておりました。そうすると大きなスペースが必要となります。これらの企画を持ってきて展示した時の一つの問題点は、有料催事です。有料催事は、箱根町だけやっていますが、スペースに区切りというものがなければならない。そうするとどれくらいの規模の有料催事ができるかということになります。そういうところが分からないと、いわゆる企画だけで事が動いてしまい、誘導ができないことになって困ります。現在は、大ホールや小ホールでは有料催事はできるでしょうが、展示系はなかなか有料催事ができない。ここが大きな問題点として出てきています。もし若い人たちが生業として美術展をやろうとしたら、非常に難しい。そうすると何かの形で団体だとか個人の作家にお金とか生業的な物が戻るような仕組みを作らなければならない。そういったことを考えながら、プランニングをしていただければと思います。ですから、

そういった意味から考えた場合に、今回の提案内容は、いわゆる設計者と施工者の一体型になっておりますので、設計の方たちがどのようなコンセプトを持っているか、非常に興味を持っておりますので、一つよろしく申し上げます。とにかく未来のあるホールであって欲しいと私は思いますので、よろしく申し上げます。ありがとうございました。